

# 民俗資料としての写真 ～佐々木直亮先生撮影写真について～

成 田 敏<sup>1)</sup>

key words: 資料写真, 撮影目的, 撮影時期, 撮影場所, 稲作作業

## 1 はじめに

筆者は今まで青森県内を主に数々の民俗調査を行ってきた。これらの調査の中では生業に関わる内容が多くを占めている。いうまでもなく、民俗のフィールド調査では話者からの聞き取りという方法が主体を占めるのであるが、こと生業に関しては聞き出した内容の実感がわからないことがしばしばあった。つまり、聞き取りする側が未経験な事柄について、言葉のやりとりだけでは限界を感じる人が多いのである。調査によっては作業に使用する用具を見せてもらったり、実際に作業をしている場面に遭遇することもないわけではない。この場合は用具や作業の有様を目の当たりにすることによって容易に理解することができる。しかし、過去に行われたことについては、用具がすでに失われ、作業を再現することも不可能な場合が多く理解するのに苦しむのである。むしろ、このような状況が大部分を占めているとあってよい。写真の1枚でもあればそれを手掛かりにし、さらに深く聞き取りをすることが可能ではないかという思いを何度かしてきた。

本稿では、故佐々木直亮先生が撮影した写真群に着目し、資料紹介としてそのおおまかな概要と民俗資料としての有効性を提示するものである。今回は多数に及ぶ写真の中から稲作における作業風景について取り上げてみたい。

## 2 佐々木直亮先生の写真資料

かつては、写真店を経営するなどの専門職を除けばカメラを所持する人は極めて少なかった。一般の人々にカメラが普及していったのは第二次世界大戦後の昭和30年代以降のことで、しかも、最初は写真の好きな富裕層の人たちであったと思われる。そして、撮影した内容は家族のスナップや旅行先の風景などが多かった。このことは、調査時話者の家のアルバムを見せてもらった際に数多く経験している。従って、民俗資料としての価値は低いものが大部分とあってよい。

佐々木直亮先生（1921～2007）は弘前大学医学部教授を勤められた方で、専門は脳卒中・高血圧予防についての疫学研究であり地域住民の保健活動の推進にも大きく貢献された。特に、青森県の特産物であるりんごの高血圧予防効果を世界にさきがけて指摘したことでも著名である。

佐々木先生がカメラを所有して撮影し出したのは昭和30年頃と思われる<sup>2)</sup>。家族や様々な風景、学会の様子等を撮影しているが、その中には町や村の情景や風俗などが多数含まれているのである。そしてこの度、遺族の御好意によって全てのネガを当館に寄贈いただいた。それは約2万8千コマにも及ぶ膨大なものである。さらに、この写真群の価値を高めているのは撮影年月日と撮影場所が特定できるものが多いことである。民俗的観点からみても稲やリンゴなどの農作業、行事、信仰に関するものや食物、民家の流し・便所など庶民生活の隅々まで及んでいる。既に佐々木先生はこれらの写真で構成された『人々と生活と』<sup>3)</sup>を刊行しておられる。

佐々木先生がこうした民俗的な写真を撮影されたのは、先生の専門である公衆衛生学に関わっている。庶民の暮らしの実態を知らなければ公衆衛生に関する研究も、さらには指導することもできないというのが佐々木先生の見解であり、その手掛かりとして、また資料として庶民の日常生活に関わる写真を撮り続けたという。佐々木先生は、『人々と生活と』の序文に次のように記している。

東北地方には“あだる”といわれてきた病気があった。その謎ときに30年を過ぎてきたのだが、その原因として“労働”が考えられていた。

東北地方の人々の生活、とくに労働については全く知らなかった私は、まず労働を知らなければならぬと思った。そのために週に一回、自転車によって学校の近くの田畑にかよって、一年を通して農家の人々の労働をみにゆき、写真を撮り続けていった。<sup>4)</sup>

1) 青森県立郷土館 学芸員 (〒030-0802 青森市本町2-8-14)

さらに、この写真群について重要であるのは、撮影時期が昭和30年代であるということにある。この時期は庶民の生活が急激に変化していったと考えられ、これらの写真はその変遷の有様を明瞭に物語っているのである。しかも、現在は撮影不可能なことからその価値は極めて高い。

### 3 稲作作業の写真

佐々木先生は米作りの一年に並々ならぬ関心を寄せ、克明に撮らえ続けている。これらの撮影場所はおおむね旧岩木町地区（現弘前市）と推定される<sup>5)</sup>。この稲作に関わる作業の写真について、筆者がかつて行った聞き取り調査とつき合わせながら若干の解説を述べていきたい<sup>6)</sup>。

#### (1) 肥料

田の肥料には主として堆肥を用いた。堆肥は馬や牛を飼育していたマヤ（厩）から引き出した敷き藁を積んで腐らせたものであった。雪が固雪となった頃に堆肥をソリに積んで田に運んだ。これを雪が消えて土が乾いてきた状態の時に田一面に散らした。写真①は運んだ堆肥を田に撒き散らしているところではないかと思われる。田の肥料として化学肥料を使用するようになったのは主に戦後からであるが、田打ちの前に撒いたといい、写真②はその様子を撮影したものであろう。背景にある山は岩木山である。



写真① 肥料を撒く（昭和31年）



写真② 化学肥料（昭和31年）

#### (2) 苗代

雪が消えるとすぐに苗代を起こす作業に取りかかった。そして4月に入ってから種を蒔いた。佐々木先生の写真には苗代を耕起している場面のものではなく、種蒔き以降の様子が撮影されている。

写真③は小型の俵のようなものから種籾を取り出し、これから苗代に蒔く場面であろう。3月の彼岸の頃に塩水選した種籾をこのような俵に入れ、20日くらい池の水に浸しておく。さらに堆肥を積み上げた場所に入れて芽出しをさせたのがこの種籾である。この写真で種籾を入れた小型の俵の形状を知ることができる。写真④は苗代に種を蒔いている場面で、保温折衷苗代の初期頃の様子である。

聞き取り調査では、苗代はたいてい本田の側にあったというが、中には写真⑤のように家屋のすぐ側にある場合もあったことだろう。苗代の面積は本田の約10分の1くらいであったという。写真⑥は手前に苗代が見え、その奥の方には田が広がっている光景である。苗代と本田との位置関係を読み取ることができる。



写真③ 種籾（昭和31か32年）



写真④ 種蒔き（昭和31か32年）



写真⑤ 苗代（昭和31か32年）



写真⑥ 苗代と本田（昭和31か32年）

### （3）田起し

苗代の作業を終えると本田の田起し作業にとりかかった。田起しのことを「田打ち」といった。古くから田打ちはサンボンカ（三本鍬）で打って土を掘り起こしたが、一日に起こすことができるのはせいぜい5～6畝くらいであった。三本鍬での田打ちでは雪が解けて土がまだ乾ききらないうちに打ったもので、土が堅くなると三本鍬では歯がたたなくなるのだという。戦後になると三本鍬から次第に馬にバッコウを引かせて行うように変わった。馬ではなく、牛にバッコウを引かせる家もあった。さらに、耕耘機を使用するようになっていく。

写真⑦は三本鍬での田打ちの場面である。おそらく家族であろうが、4人で一斉に取りかかっているこの写真はこの仕事が重労働であったことを物語っている。写真⑧は牛にバッコウを引かせている場面である。写真⑦に比べて作業が労働が軽減され、効率性がよくなったことを感じ取れる。なお、佐々木先生の写真には馬にバッコウを引かせるものはない。



写真⑦ 三本鍬での田打ち（昭和31年）



写真⑧ 牛によるバッコウ（昭和31年）

### （4）田かき

田打ちの後に田に水を入れ、土を泥状にするために田かきをしたが、マンガ（馬鍬）を馬や牛に引かせて行った。最初に行う田かきをアラグリといい、2回目をシロカギといった。アラグリとシロカギの間にナカガキをする人もいた。昔はシロカギして「水が濁っているうちに植えなければならないものだ」といい、そうでなければ苗がつきにくかったという。

写真⑨は馬で田かきを行っている場面である。マンガを持つ人（マンガオシという）と馬の鼻先につけたサへを持って馬を操縦する人（サヘドリという）の二人が作業している。旧岩木町の調査では、マンガオシは大人の男性で、サヘドリは主に子供の役目であったというが、津軽地方の他地域の調査では夫婦で行うことも多いとされる。この写真も男女で行っている。馬ではなく牛を使用することもあり、佐々木先生の写真には牛を用いているものもある。

旧岩木町葛原地区のある農家では、マンガを使用する以前は鍬状のマンノウで田かき（アラグリ）をし、後にマンガで田かきをするようになったという。写真⑩は鍬状の農具を用いて田かきをしていると思われるが、手にしているのがマンノウかどうかは定かでない。





写真⑨ 田かき（昭和31年）



写真⑩ 田かき（昭和31年）

#### （5）田植え

田植えは旧暦5月の入梅のころに行われたので、田植えを「ゴガツ」といった。「クミッコ」といって本家と分家・兄弟同士・友人同士など3、4軒くらいが組んで共同作業をした。機械が普及して個人の家だけで田植えができるようになって「クミッコ」はなくなった。

苗を取る人をネドリといい、この役に当たるのは主に経験のある年配の男性であった。写真⑩は苗代から苗を取っている場面である。この時期はまだ肌寒く、しかもカラアシ（素足）で苗代に入ったので、ネドリはチョハンメエ（朝飯前）から酒を一杯やって作業したものであったという。植え手も同様にカラアシであったが、後にゴム長靴を履くようになった。この写真では既にゴム長靴を履いているが、体が冷えるため犬の皮を背に背着て苗取り作業を行っている。

田まで苗を運ぶのは若者の仕事であった。聞き取り調査では、苗を入れた籠をカヅギサオ（天秤棒）で肩に担いで運んだり、ゲシ樽（下肥を入れる樽）に苗を入れ背負って運んだりしたが、写真⑫はゲシ樽をカヅギサオで運んでいる。

植える前に田植え型を転がし、田面に格子状の模様をつけた。植え手はこの模様の交点部分に苗を植えていく。田植え型を用いる以前は田の真ん中に縄を張り、この縄を中心に植え手が並んで植えた。写真⑬は型を転がしている場面である。

植え手はほとんど女性であり、写真⑭は苗を植えている場面である。前述のように田面につけられた格子状の印の交差点に苗を植えていったのがよくわかる。植えるには前進と後進と両方があり、その家によって異なっていた。一人が足の間に2株、その左右に1株ずつの計4株を植えていった。苗は植え手の腰につけた箱に入れていて、後に苗籠を腰につけるようになったという。この写真では苗籠を使用している。また、植え手によって上手下手があり、ベテランらしき女性は早く植えて先頭にたっている。

苗籠を使用する以前は苗の補充係が一人いて田の所々に苗束を撒いておいた。植え手はそれを拾って植えていく。写真⑮を見ると田面に苗が散らばっているのがわかる。苗を補充する役目の人をネマギ（苗蒔き）といい、植え手は苗が足りなくなるとが叫んで要求した。昭和30、31年頃は苗を撒く方法と苗籠を用いる方法の両方が行われていたことになる。

田植え時の昼食は、当日に植える田の持ち主が出したが、酒を出したりして豪華であったという。写真⑯は昼食の場面だと思われる。作業の合間には休憩をとったが、これをイップグヤスミといい、午前10時頃と午後3時半頃の2回であった。イップグヤスミにはアズキママ（赤飯）や干し餅などを食べたという。



写真⑪ 苗取り（昭和30年）



写真⑫ 苗運び（昭和31年）



写真⑬ 田植え型を転がす (昭和30年)



写真⑭ 苗を植える (昭和30年)



写真⑮ 苗を植える (昭和31年)



写真⑯ 昼食 (昭和31年)

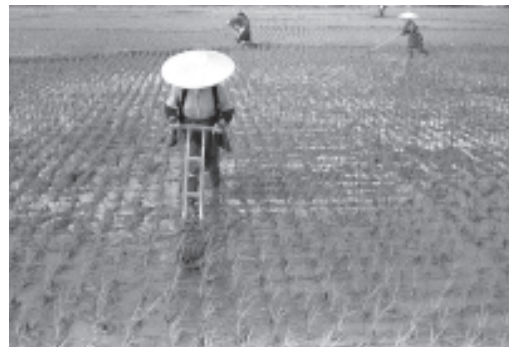
#### (6) 除 草

除草を「田の草取り」といい、田植えが終わって10～15日後に行った。通常、一番草、二番草、三番草と3回行ったが、2回までのところもあった。

除草はブリキ製のクダ(管)を手の五本指につけ、稲株の根元を掻くように行った。クダをつけないと爪がだめになり、痛くなったものだという。写真⑰は除草の作業風景である。その後、手押しの除草機を使用して行うようになる。写真⑱は除草機を用いての作業風景である。株間を除草機で押している様子がわかる。



写真⑰ 手での除草 (昭和31か32年)



写真⑱ 除草機での除草 (昭和31か32年)

#### (7) 稲刈り

秋に稲穂が稔り、そろそろ稲刈りをする時期になるとスズメに穂をついばまれる被害にあうようになる。これを防ぐため、スズメが近づかないように人に見立てたカカシを立てた。その他、スズメボイといって音でスズメを驚かす方法も行われた。空き缶などをつけた縄を張り、これを引くことによって音が出る仕組みであった。田に小さな小屋を建て、そこに縄の端を持った人が入ってスズメが近づくと縄を引いて追い払う。写真⑲はスズメボイの光景で、撮影場所は南津軽郡である。このスズメボイは子供がよくやらされたというが、この写真は主婦が行っている。

秋には稲刈りをしたが、その時期は今よりずっと遅かった。今は機械で行うが、以前は鎌で手刈りした。田の多少によるが、手刈りだと1週間から10日を要した。刈るときは1株ずつではなく何株か手につかみいっぺんに刈る。片手の手のひらいっぱい分が1把であった。手の大きさが1把の太さが違ったが、おおむね7、8株で1把であった。写真⑳は稲を鎌で刈っている場面である。刈った稲の数本でもって結わえて1束(1把)にした。その様子が写真㉑と思われ、稲で結わえている様子がわかる。この方法だと脱穀する際に結わえるのに使用した稲が折れ曲がって無駄

になることもあるので、津軽地方の他地区ではこれをシナゲとよぶ稲藁で結わえる方法が一般的であった。写真⑳は南津軽郡で撮影されたもので、腰に結わえるための稲藁（シナゲ）をつけているところから、稲藁で束ねる方法の場面と思われる。旧岩木町でも、その後は稲藁で束ねるようになっていった。



写真⑱ スズメボイ（昭和31か32年）  
南津軽郡



写真⑳ 稲刈り（昭和31か32年）



写真㉑ 稲刈り（昭和31か32年）



写真㉒ 稲刈り（昭和31か32年）  
南津軽郡

## （8）乾燥

刈った稲は田で乾燥させた。古くからの乾燥法は刈った稲をシマダテにするもので、後に棒掛けによる方法になった。現在は、棒掛けのほかにハサ掛けもみられるが、機械刈りのため田で乾燥させることは次第になくなってきている。

シマダテは稲束のウラ（穂先の方）同士を稲藁で結わえてモト（根元の方）を広げて立てておくものであった。シマダテ1つの量は、同じ旧岩木町においても地区によって差異があり、如来瀬地区の場合、稲束8把で1シマ（ヒトシマ）とし、30シマが米1俵分に相当するという。写真㉓がシマダテだと思われるが、現在ではほとんど見ることができない。

シマダテである程度乾燥させると、今度は田でニオに積み替え（ニオを組むという）さらに乾燥させた。このニオをタニオともいう。乾燥させるほかに、折れたり曲がったり稲は脱穀しにくいので、ニオに積んで真っ直ぐにするという意味もあった。ニオに積むには穂を中に入れて稲束を積んだが、一つのニオで概ね50～60シマ分であった。昔の田は小さかったので4、5枚でニオが一つであったという。写真㉔はニオに積んでいる場面と思われ、後ろには積み終えたニオが見える。

写真㉔は棒掛けの写真であるが、この乾燥法は現在でも行われている。杭を立て、それに稲束を掛けていくもので、シマダテのようにニオに積み替えることはしない。旧岩木町地域でシマダテから棒掛けへいつ頃から移行していったかは定かでないが、昭和31年か32年撮影の写真㉕ではシマダテ・ニオと棒掛けが混在している。従ってこの時期がシマダテから棒掛けへの過渡期であったのではないと思われる。





写真㉓ シマダテ（昭和31か32年）



写真㉔ ニオ積み（昭和31か32年）



写真㉕ 棒掛け（昭和31か32年）



写真㉖ 秋の水田概観（昭和31か32年）

### （9）運 搬

シマダテからニオに積んで乾燥させた稲は雪が降る前に家に運んだ。かつては人がショイコ（背負い梯子）に稲をつけ背負って家に運んだ。12把を一マル（ヒトマル）といい、力の強い人は10マルも背負ったものだという。家に運んだ稲は屋敷地にニオ積みしたが、このニオをオオニオともいい、頂上部には稲藁で編んだノマを何枚もかぶせた。

写真㉔は稲を背負って運んでいる場面である。さらにリヤカーに積んで家まで運んだものであろう。写真㉕は耕耘機を用いて運搬している場面である。聞き取り調査では、耕耘機がこの地域に導入されたのは昭和30年代であったことを確認しているが、この写真によると一部の農家であろうが、昭和31、32年頃既に耕耘機の導入がなされていたことがわかる。



写真㉗ 稲の運搬（昭和31か32年）



写真㉘ 稲の運搬（昭和31か32年）

### （10）脱 穀

屋敷地にニオ積みしておいた稲は脱穀して初にした。旧岩木町如来瀬地区では、20年くらい前まで旧暦で正月をしたもので、かつては旧正月前までに脱穀を終えるようにしたものだという。家の中の土間で足踏み脱穀機を用い朝早くから晩遅くまで作業をした。

しかし、昭和31か32年に撮影された写真㉗・写真㉘では家に稲を運ぶことなく田で脱穀作業をしている。しかも動力による脱穀である。脱穀作業が動力化していくのは家によってかなりの差異があり、この農家ではかなり早かったと想定されるが、昭和30年代初期には導入している農家が既にあったことが知れる。



写真㉙ 脱穀作業（昭和31か32年）



写真㉚ 脱穀作業（昭和31か32年）

以上のように、佐々木先生が撮影されたこれらの写真からは昭和30年代初期における稲作作業の様相が手に取るようにわかるのである。それとともに、聞き取り調査では明確に知ることのできなかつた作業の細部を読み取ることができるとともに、新たに確認をとらなければならない多くの事柄が出てきた。この写真を話者に提示し、再調査をしたいと感じている。

本稿では主に稲作の作業内容ばかりに注目して述べてきたが、これらの写真には他の事柄についても多くの興味ある内容が含まれている。例えば、当時の農作業における服装についても注目したい。昭和30年代の初期頃は多くの男性の作業着が洋服化しているのに対して、女性は依然として伝統的な和服で作業をしており、それがいつ頃まで続いたのかなど興味深い。

#### 4 おわりに

佐々木先生がこれらの写真を撮影した本来の目的は我々民俗研究者と異なるものであったが、カメラを通して農民に注ぐ眼差しは我々と何ら変わることがないことを感じる。その目を通して撮影された写真は確実性があり、有効かつ優れた情報を提供してくれるのである。ことに、昭和30年代という農民生活が急変していった時代の写真であることにはなおさらのこと大なる価値を認めることができる。こうした意味から佐々木直亮先生の写真は第一級の民俗資料と評価することができるのである。また、民俗資料としてばかりでなく、この写真群が近現代資料をはじめ多方面で活用されることが期待されよう。そのための分類・整理事業も急がなければならないと感じている。それが佐々木直亮先生の御意志に沿うものであるとも思っている。

このまれにみる貴重な写真を残していただいた故佐々木直亮先生とこれらのネガを全て御提供いただいた佐々木悦夫人をはじめ御遺族に対し改めて感謝申し上げる。

#### <註>

- 2) 佐々木氏は撮影内容を記した克明なメモを残されており、それによると最初の年月日が昭和30年4月とある。しかし、このメモとネガの順に不明確なものもあり、今後、その照合作業が必要とされている。
- 3) 『人々と生活と』（佐々木直亮・1984年・弘前大学医学部衛生学教室）。昭和59年（1984）に弘前市で開催された第49回日本民族衛生学会総会記念写真集として刊行された。
- 4) 青森県内で「あだる」というのは毒や食べ物などにあたることも意味するが、いわゆる「中風」をも意味する。ここでの「あだる」も中風のこと。佐々木先生は、昭和29年（1954年）から始まった「東北地方住民の脳卒中ないし高血圧の予防に関する研究」で、その要因が重労働にあるというより塩分のとりすぎによるものだというを指摘し、多数の論文を著している。
- 5) これらの写真の撮影場所は今のところ2)のメモでは明らかではない。佐々木先生は自転車でかけずり回って写真撮影されたといい、農作業の写真は先生の勤務する弘前大学からさほど遠くない地域であり、背景の地形などからも判断すると同地区ではないかと推定される。従って、掲載した写真に撮影地を記していない場合は全てこの地域と想定する。なお、稲作作業に関わる写真は掲載したものが全てでなく、一部である。
- 6) 筆者は平成17年から平成22年にかけて旧岩木町内で『新編弘前市史 通史編 岩木地区』（2010・弘前市）に関わる民俗調査を行ってきた。その概要は同誌の「民俗編・生業」に掲載されている。